

群 教 セ	E03 - 03
	令3.278集
	生徒指導

状況に応じた危険予測ができ、 適切な行動選択をすることのできる生徒の育成

——デジタル地図検索機能を活用したグループワークを通して——

特別研修員 高田 繁

I 研究テーマ設定の理由

群馬県では、県内における高校生の自転車事故の割合は全国ワーストであることや、令和3年より自転車におけるヘルメット着用の努力義務化や保険加入の義務化する条例が施行されていることから、県全体の交通安全における機運は高まっていると言える。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）における科目「保健」の目標では、「保健の見方・考え方を働かせ、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、生涯を通じて人々が自らの健康や環境を適切に管理し、改善していくための資質・能力を育成する。」と掲げてある。保健体育における自己実現や交通に関する学習を通して、社会の中での様々な危険について自ら判断し、自らの身を守ることのできる能力や態度を身に付けることができるようになることを考えた。自らの考え方や行動を磨き、危険に対応する能力が育まれることで、生活上の様々な危険を未然に防げたり、深刻な事態になることを避けたりすることができる。また、グループワークや意見交換の活動を通して、自他の日常生活における行動を比較したり交通の場면을多面的に捉えたりすることで、適切な行動選択をするための考え方を身に付けさせたいと考えた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

適切な行動選択とは、様々な場面や状況で、リスクの低い選択ができることやよりよい選択ができることであると考えられる。それらを育成し、自己管理能力を高めさせるためには、生徒自身が日常の中に潜む危険の可能性に気付くことが重要であると考え、以下の手立てを取り入れた。

手立て1 グループワークによる協働的な学習

ペアワークや4人組のグループワークを実施し、自分の考えを述べたり、他者の観点を自分に取り入れたりする。また、意見を共有する中で、多面的かつ分析的に危険予測ができるようにする。

手立て2 ICT 端末の活用

デジタル地図検索機能を活用し、実際の通学路における危険箇所を立体的に分析する。また、表計算ソフトやデジタルホワイトボードを活用し、様々な意見を即時的に共有できるようにする。

様々な交通の場면을示したイラストや写真を通して意見を出し合い、そこに潜む危険を予測させ、意見を共有する。また、デジタル地図検索機能を活用することで、実際の場面に近い状態でシミュレーションすることができるため、自転車目線と自動車目線のそれぞれの立場から場면을より立体的に捉えることができ、他者とイメージを共有しやすい利点もある。さらに、少人数のグループで取り組ませることで、「知る・学ぶ、共有する、比較・分析する、生かす」ことに主体的に取り組み、自己有用感の醸成も期待できると考える。

III 研究のまとめ

1 成果

- デジタル地図検索機能を活用し視覚的なアプローチをしたことによって、同じ場所や場面の危険予測でも、自転車目線と自動車目線とでそれぞれの立場から状況を多面的に捉えることができた。その結果、「自転車の立場から捉えると自動車のここが危ないと感じていたが、自動車の立場から捉えると自転車のここが危ないと感じる」などとそれぞれの視点から場면을捉えることができたため、高い学習効果が得られた。また、表計算ソフトやデジタルホワイトボードを活用したことで、他のグループの意見も即時的に共有でき、より多くの考えに触れることができた。さらに、ICT 端末の活用に消極的な生徒も、タッチパネル機能で直感的に操作できており主体的に学習に取り組む様子が見られた。
- 自転車目線と自動車目線のそれぞれの立場及び時間帯や天候の状況など、自他の様々な場面の捉え方を共有できたことで、授業後の振り返りでも「参考になった」や「自分にはない考え方だったので取り入れていきたい」などという前向きな記述も多く見られ、今後の実生活に生かしている姿勢が見られた。
- 実際の自分の通学路を題材にして活動させたことで、自身の実生活と照らし合わせながらイメージすることができている様子が見られた。また、少人数のグループで活動させたことで、普段意見が言えない生徒も主体的に関わることもできた。

2 課題

- 今回は自分の通学路を題材にして意見を出し合ったが、雨天や強風などの天候や、小学生の登下校の時間帯や部活動帰りの暗い状況などの様々な場面の条件下でも、より健康的な判断ができるよう、他者の考えを自身の考えに取り入れていくことが必要である。さらに今後は、より実生活に生かしていくために、不慣れな場所や初見の場面においても、適切な行動選択ができるよう、危険予測の意識を日常的に高くもたせる必要がある。
- 表計算ソフトやデジタルホワイトボードを活用して意見を入力させる場面において、自他の考えの根拠を比較しやすくさせるために、キーワードを入れさせたり定型文をアレンジさせたりするなどの制限や工夫が必要である。

実践例

1 題材名 「状況に応じた適切な行動選択をしよう」（第1学年・2学期）

2 本題材について

本題材は、日常に潜む様々な危険から身を守るべく自己管理能力を高めさせることがねらいである。そのためには、多面的な視点で物事を捉えることや、自分にはない他者のよい考え方を取り入れることが必要である。また、生徒指導提要には、学習指導における生徒指導は、「①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの三つの視点に留意することが考えられます。」とある。保健の学習指導の場においても、意図的に上記の観点を取り入れた手立てを用いることで、生徒の自己有用感を涵養することができることも考えた。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	安全な社会生活について、自他や社会の課題を発見し、その解決を目指した活動を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。	
	ア	安全な社会生活について理解を深めることができる。 (知識及び技能)
	イ	安全な社会生活について、安全に関する原則や概念に着目して危険の予測やその回避の方法を考え、それらを表現することができる。 (思考力、判断力、表現力等)
	ウ	生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養うことができる。 (学びに向かう力、人間性等)
評価 規準	(1) 交通事故を防止するために、それぞれの場面における有益な情報を多く取り入れることができる。 (知識・技能)	
	(2) 自他の判断の根拠となる考えを明示・比較し、より健康的な判断ができるよう自身の考えに取り入れることができている。 (思考・判断・表現)	
	(3) 生徒が現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにすることを目指して学習に取り組むことができる。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・デジタルホワイトボードを活用し、交通の場面を模した交差点のイラストにはどのような危険が潜んでいるか意見を出し、自他の考えを比較する。
追究する	第2時	・前時の振り返りをして、健康的な自己管理をするための効果的な考え方を自身の実生活に取り入れることができるようにする。 ・表計算ソフトを活用し、交差点の写真に潜む危険を出し合い、自他の考えを比較・分析する。
まとめる	第3時	・デジタル地図検索機能を活用し、立体的に捉えた通学路の一場面における危険を主体・環境・車両の3要因の観点から出し合う。 ・表計算ソフトを活用し、自他の考えを比較・分析し、取り入れる。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全3時間計画の第3時に当たる。1学期に科目「保健」における「健康的な意思決定・行動選択」の単元において健康的な自己管理ができるような考え方を学習した。具体的には、様々な情報の適切な取り入れ方や、交通の場面を模した交差点のイラストを提示し、そこに潜む危険性をグループで協議し意見を出し合うものであり、自己管理能力を高めるためのものであった。この内容を踏まえ、更なる生徒の自己管理能力の向上を図るため、自身の実生活の場面における様々な状況での危険予測に生かすことができるよう、次の二つの手立てを考えた。

手立て1 グループワークによる協働的な学習

ペアワークや4人組のグループワークを実施し、自分の考えを述べたり、他者の観点を自分に取り入れたりする。また、意見を共有する中で、多面的かつ分析的に危険予測ができるようにする。

手立て2 ICT端末の活用

デジタル地図検索機能を活用し、実際の通学路における危険箇所を立体的に分析する。また、表計算ソフトやデジタルホワイトボードを活用し、様々な意見を即時的に共有できるようにする。

4 授業の実際

これまでに、交通の場면을模したイラストや交差点の写真を通して、そこに潜む危険について話し合い、自他の意見をデジタルホワイトボードや表計算ソフトを通して比較させた。また、集約された意見はICT端末の利点を生かし、いつでも取り出せるようにクラウド上で共有してあり、自分にはない他者のよい考え方を取り入れるよう意識付けをしてある。

(1) 講義

群馬県の高校生の自転車による交通事故の現状と要因を理解するために講義をおこなった。まず、日本における近年の交通事故の現状として、交差点での発生が多いことや発生件数、発生している時間帯などを学習した。次に、群馬県の高校生の自転車による交通事故の特徴をまとめた資料を提示し、発生している場所や時間帯、時期、天候などを把握させ比較させた(図1)。交通事故の要因は、主体・環境・車両の3要因に分類でき、それぞれの観点からどのように交通事故を防いでいけるかを追究するために、状況に応じて適切な判断をすることを本時のテーマとした。さらに、研究協力校における近年の事故の状況やヘルメットの着用率にも触れ、実態を把握させることで身近な話題として捉えられるようにし、日常における様々な自己選択や自己決定の場面において適切な行動選択ができるように意識付けをした。

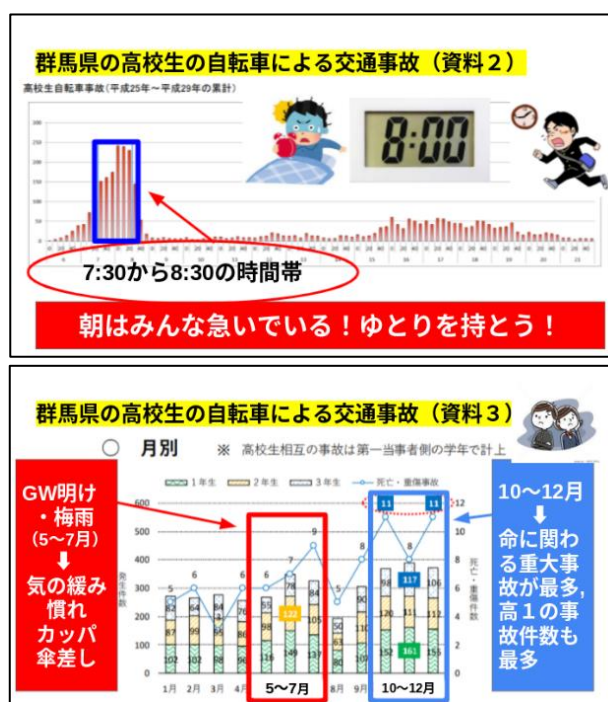


図1 交通事故の現状の把握

(2) ICT端末を活用したグループワークの実施とその意見の共有

デジタル地図検索機能を活用し、立体的に交差点の場면을捉えた。それぞれがICT端末に表示された場면을自在に変えながら、それぞれの視点で場면을切り取って危険箇所を考えたり話し合ったりしている様子が見られた(図2)。



図2 デジタル地図検索機能を活用し、それぞれが場면을立体的に捉えている様子

次に、グループワークを通してそれぞれの気付いたことを互いに共有し、意見をまとめ、表計算ソフトに入力させた。その際には「(主体・環境・車両要因が) ○○なので、□□に気を付けよう」という定型文をアレンジして入力させることで、判断の根拠となる部分を比較しやすくした。

入力された意見は即時的に共有ができるため、自他のグループの様々な意見に触れさせることができた（図3）。また、他のグループの意見を基にそれらを比較し、自グループの話し合いを深めている様子も見られた。


	班	自転車目線（主体・環境・車両要因が）〇〇なので、□□に気を付けよう。
	B	信号待ちしている車があると、通行の時に道が狭く感じたり、電柱を避けると車にぶつかりそうになるので、慎重に行こう。
	E	朝の時間帯は急いでいる車が多いから、横断歩道を通行する時も運転者とアイコンタクトを取って、事故を未然に防ごう。
	班	自動車目線（主体・環境・車両要因が）〇〇なので、□□に気を付けよう。
	B	歩道が狭く、電柱も邪魔な位置にあるので、自転車が当たってこないか心配。
	F	高校生の登下校の時間帯は自転車が多いため、並列をして車道にはみ出していたり急に飛び出してきたりすることに気を付けよう。

図3 表計算ソフトを活用し、各グループの意見を即時的に共有している場面

(3) 振り返り

アンケート作成ソフトを活用して、自他の意見を比較し、どのような点が今後の実生活に生かせるかを記入させた。「自分では今まで気にしていなかったところも危険が潜んでいることに気付けたから取り入れていきたい」や「自転車と自動車とでは危険の捉え方自体が違うことに気付いたので、自転車を運転する際にも自動車目線を取り入れられるようにして安全に運転したい」などという意見が多く見られた（図4）。次時では、アンケート作成ソフトで集約した意見を一覧にして提示し、危険予測に対する意識をより深化させることにつなげた。

<p>今日の学習を通して、クラスメイトの意見のどのような点が自分の生活に生かせると感じましたか？（①主体、②環境、③車両の3つの要因どれかに触れて具体的に答えられるとよい。）37件の回答</p> <p>どの場所でも、事故が起こらないようにするためには、スピードを出しすぎないで走行することや一時停止をしっかりとするということが多く書かれていたので、自分もそれに気をつけて自転車を運転しようと思った。</p> <p>自分目線だけでなく、車目線や歩行者目線などいろんな目線でみれるようにしたいと思いました。自転車と自動車では道路の危険な場所も違うことがあると気づいたので特に車目線で気を付けられるようにしたいです。</p> <p>気候が悪かったりして、交通事故が起こりやすくなることもあることに気づくことができた。他の人の意見からいつもとは違う視点から考えられたのでよかった。</p> <p>自転車目線と車目線の両方から見ることで、自分の通学路の危険な箇所をより知ることができました。交通事故は交差点で起こりやすいので、今回の授業を生かして、気を付けていきたいなと思います。</p> <p>横断歩道がないところでやむなしの横断がどこの場所でも多く、安全運転をし、余裕を待っての登下校が必要だとわかりました。事故をこれ以上起こさないためにも、一時停止をしっかりと、ヘルメットの大切さを伝えていきたいです。</p> <p>信号がない交差点など、事故などが起こりやすいと思うので、アイコンタクトを車に乗っている人などできるようにすれば、危ない事などを回避することなどができると思ったので、普段自転に乗るときに心がけたい。</p>

図4 アンケート作成ソフトに集約された意見

5 考察

少人数のグループワークを実施することで、お互いが補い合うことができたため、普段あまり積極的に参加できない生徒も主体的に話し合いに参加することができていた。さらに、通学路別でグループを分けたため、実生活に直結した場面での危険予測を考えることができ、日常生活に生かせる題材であったと言える。今後は、初見の場面においても状況に応じた適切な危険予測ができるようにしていくことが求められる。

ICT端末を活用することで、意欲の低い生徒が主体的に取り組むことができた。特に、デジタル地図検索機能を活用したことで、立体的に場面を捉えることができ、話し合いも活発におこなわれたことから非常に効果的だったと言える。また、アンケート作成ソフトによる振り返りでも即時的に回答を回収でき、意見を共有することもできるため、より深い学びにつながった。さらに、生徒全員から意見を回収できることやいつでも取り出して繰り返し確認することも非常に効果的だと言える。しかし、即時的な共有や直感的な操作をすることができるなど便利である反面、不慣れな作業を求められた際には予期せぬ誤操作が生じる場面が見られた。指示を的確にすることや取りまわせる作業を簡素化・単純化するなど、不慣れな生徒への支援の工夫を盛り込むことが課題と言える。

今後は、ICT端末ならではの視覚的なアプローチや、より整理しやすく、比較・分析しやすいデジタルワークシートの活用方法などを模索していきたい。また、ICT端末を活用する上で、ネットワークの環境整備だけでなく、学習支援ソフトの活用方法や機器の操作についてなど、教員の活用技術の向上を図っていくことが必要であると考えている。